



Title	小児の付き添い入院に対する母親と看護婦の意識調査-第1報-
Author(s)	宮原, 春美; 宮下, 弘子; 松尾, 壱佐; 藤本, 澄江; 宮崎, 麗子; 吉野, 麻紀
Citation	長崎大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of the School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University. 1997, 10, p.25-27
Issue Date	1997-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/18258
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-24T16:14:53Z

小児の付き添い入院に対する母親と看護婦の意識調査

— 第1報 —

宮原 春美¹・宮下 弘子¹・松尾 壱佐²

藤本 澄江³・宮崎 麗子⁴・吉野 麻紀⁵

要 旨 長崎県下4施設の小児病棟に勤務する看護婦とその病棟に入院している小児に付き添う母親に対して、付き添い入院をどのようにとらえているかについてアンケート調査を行い、看護婦76人、母親91人からの回答を得た。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. 付き添い入院が小児にとって良いと肯定的にとらえているものは母親が94.5%、看護婦が75.1%であった。
2. 母親にとって良いと肯定的にとらえているものは母親が63.7%、看護婦が34.2%であった。
3. 家族にとって良いととらえたものは母親が29.7%、看護婦が5.3%であった。付き添い入院については小児、母親、家族のいずれの視点からも、母親の方が看護婦よりも肯定的なとらえ方をしていた。また、今後も付き添い入院を希望する母親は89.0%であった。

長崎大医療技短大紀 10: 25-27, 1996

Key Words : 小児, 付き添い入院, 意識調査

はじめに

近年、医療や看護への家族参加やセルフケアへの関心が高まっている¹⁾。なかでも小児看護においては幼い小児にとって家族、特に母親の関与は断ち切り難いものである。それ故に母親の小児看護への参加が奨励されている。しかし、母親の協力を求める反面、母親や家族に対して過度の負担を強いていることもあるのではないかと思われる。

そこで今回、私たちは入院している小児に付き添っている母親と小児病棟に勤務する看護婦を対象に母親と看護婦の付き添い入院についてのとらえ方の違いがあるかどうかについて調査を行い、付き添い入院の望ましいあり方について検討した。

研究方法

調査対象は県下の総合病院のうち、承諾の得られた4施設の小児病棟に勤務する看護婦とその病棟に入院中の小児に付き添っている母親である。

調査方法は各病院の病棟婦長に対して看護婦、母親へのアンケート用紙の配布、回収を依頼した。

調査内容は付き添い入院について母親と看護婦がどの

ようにとらえているかを小児にとって、母親にとって、家族にとっての三つの視点から「非常によい」、「どちらかといえばよい」、「どちらでもない」、「どちらかといえばよくない」、「非常によくない」の5段階で回答を求め、「非常によい」、「どちらかといえばよい」を肯定的意見、「どちらかといえばよくない」、「非常によくない」を否定的意見として分析した。また今後も付き添い入院を希望するかどうか、さらに病院に対する要望を尋ねた。なおプライバシー保護のため記入内容が漏れないよう配布時に封筒を添え、回収に際して厳封してもらうようにした。

調査期間は1994年7月末から8月末までの1カ月間である。

アンケートに対して回答の得られたのは看護婦104人中76人(回収率73.1%)、母親120人中91人(回収率75.8%)であった。

結 果

1. 対象者の背景

患児の背景は年齢では0～3歳が50人(54.9%)、4～9歳が32人(35.2%)であった。入院回数では初回が

1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

2 愛野町役場

3 島原保健所

4 厳原保健所

5 長崎大学医学部附属病院

50人 (54.9%) 2回以上が38人 (41.8%)であり、家族構成では核家族が58人 (63.7%)、同胞の有無では有りが65人 (71.4%)であった。

2. 付き添いに対するとらえ方の違い

付き添い入院について母親と看護婦がどのようにとらえているかを小児にとって、母親にとって、家族にとっての三つの視点からみた。

小児にとってどうかという視点からは肯定的意見が、母親86人 (94.5%)、看護婦57人 (75.1%)であり、母親の方が有意に肯定的意見が多かった。

同様に母親にとってどうかという視点からは、母親が58人 (63.7%)、看護婦が26人 (34.2%)、家族にとってという視点からは、母親27人 (29.7%)、看護婦4人 (5.3%)でいずれも母親の方が有意に肯定的意見が多かった (表1)。

3. 付き添いの是非に関する理由

次にそれぞれの回答を選択した理由を自由記載してもらった。

小児にとってという視点からは付き添いの良い面として母親、看護婦 (以下、両者)とも、「精神的安定につながる」や「母子間のスキンシップを常にとることが大切」があげられており、看護婦の意見として少数ではあるが「治療に協力できる」「幼児期であれば危険防止になる」というものもあった。悪い面としては「甘えが出て困る」「母親への依存度が高い」という理由を両者があげており、看護婦の意見では「治療の面では妨げになることもあり良くない。小児が周囲になじまない」というものもあった。

次に母親にとってどうかという視点からは、両者とも「精神的安定」や「患児の様子・症状が常にわかる」などから良いと答えながらも、疲労や家事・家庭に残した子供・仕事が心配という意見もあった。

家族にとってという視点からは、良い面として両者とも「家族も安心できる」「症状がわかる」「その日の経過がわかりやすい」「協力し合うことの大切さがわかる」などを挙げており、母親と看護婦において大きな違いはみられなかった。また悪い面として両者とも「負担がかかる」「生活のリズムが崩れる」などを挙げていた。

4. 今後の付き添い希望について

今後も付き添いを希望する母親は91人中81人 (89.0%)と高率であった。しかし、61人 (67.0%)の母親が看護婦や病院に対し何らかの要望があると答えていた。要望内容は複数回答であるが「もっと話を聞いて欲しい」が58人 (95.1%)、「付き添いに対する環境を整えて欲しい」が56人 (91.8%)、「子供の容態をもっと観察して欲しい」が56人 (91.8%)、「完全看護にして欲しい」が55人 (90.2%)などであった。

表1. 付き添い入院に対するとらえ方の違い

小児にとって

	肯定的意見	どちらでもない	否定的意見
母親 N=91	86 (94.5)	5 (5.5)	0
看護婦 N=75	57 (76.0)	15 (20.0)	3 (4.0)

**

母親にとって

	肯定的意見	どちらでもない	否定的意見
母親 N=91	58 (63.7)	28 (30.8)	5 (5.5)
看護婦 N=76	26 (34.2)	47 (61.9)	3 (3.9)

**

家庭にとって

	肯定的意見	どちらでもない	否定的意見
母親 N=86	27 (31.4)	30 (34.9)	29 (33.7)
看護婦 N=76	4 (5.3)	43 (56.5)	29 (38.2)

**

** P<0.01

考 察

付き添い入院について、小児にとっての視点では母親・看護婦共に肯定的にとらえているものが多かった。小児にとって付き添い入院を肯定する理由として母親、看護婦両者とも小児の精神的安定やスキンシップなどをあげていた。村田ら²⁾や清水³⁾、鈴木⁴⁾も付き添い入院を肯定する第一の理由として、子どもの情緒的安定をあげており、付き添いを肯定する理由はどの調査でも同様であるといえる。しかし、今回の我々の調査では肯定的な意見の割合が看護婦と母親では有意な差がみられた。これは看護婦が付き添いの是非を小児の情緒面からだけみるのではなく、治療面や看護管理の面からもみていると考えられる。J.ロバートソンも「幼児は母親がいると、特に検査や処置をするとき、扱いがずっと困難になる」⁵⁾と指摘しており、看護管理や治療面からみると必ずしも肯定ばかりはできないということなのかもしれない。

母親にとってどうかという視点からでも有意差がみられたが、これは、母親にとっては母親の負担の大きさは自分のことであるので「自分は我慢してでも」という思いがあり、一方看護婦はその負担の大きさを客観的にとらえられるが故に肯定しかねるという背景があるように思われた。

家族にとっての視点では肯定率がさらに減少している。看護婦を対象とした中村⁶⁾の調査でも、付き添いが望ましくない理由の第一位として「家族の負担」があがっており、やはり母親も看護婦もその負担の大きさを目の当

たりにしているためであろう。

以上のように考えると、母親の小児看護への参加といえながら、現実には母親や家族に対して過度の負担を強いているのではないかという危惧がもたれる。

付き添い入院を患児・母親・看護婦にとって最も良い方法で実施するには、「もっと話を聞いて欲しい」、「環境を整えて欲しい」、「子供の容態をもっと観察して欲しい」などの要望を反映し、付き添うことが母親、家族の犠牲の上に成り立つことのないよう看護者は考慮していく必要があるように思われる。

この研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力くださいました病院関係者をはじめ、入院児のご家族の方々に厚く御礼申し上げます。なお本論文の要旨は第42回日本小児保健学会で報告した。

文 献

1. 村田恵子：小児ケアをめぐる看護婦と親の役割意識が示唆するもの，小児看護，16:1615-1621, 1993.
2. 村田恵子，波多野梗子：入院児の看護における看護婦と母親の役割（2）—看護婦および母親の看護活動の現実と現実認知，期待認知—，看護研究，10:343-357, 1977.
3. 清水志保子：入院児の付添の実態と今後の方向，ナースステーション，10:73-78, 1980.
4. 鈴木恵理子：小児病棟における付き添いのあり方—静岡県の実態をとおして考える—，小児看護，8:885-892, 1985.
5. J. ロバートソン：看護婦と母親の役割—入院した乳幼児の看護—，メヂカルフレンド社，東京，1975，pp53-69.
6. 中村美保，吉武香代子，桜井幸，武田淳子：小児看護における母親の付添いに関する看護婦の意識について，千葉大学看護学部紀要，3:9-17, 1989.